

## 新・川崎幸病院の理念

理事長 石井 暎禧

大幅に遅れていた川崎幸病院の移転新築事業がいよいよ本格的に動き出しました。そこで、改めて新病院で実現しようとしている事がらを述べてみたいと思います。

川崎駅西口再開発の一角である今回の事業には、医療機関、福祉施設など7者もの応募があり、石心会はその中からトップで選ばれました。選考委員会の中の地域関係者はほぼ全て石心会に票を入れてくれましたが、そのことが今回の事業の出発点であると同時にこの事業の本質を物語っていると思います。

私は選定委員会での説明で、川崎幸病院が幸区にとってどうしても必要な病院であることを具体的な数字を挙げて説明しました。幸区の人口15万人は地方なら一つの市と言ってもよい規模で、全国平均で考えれば1,000床あっても不思議ではありません。これを265床で担ってゆく川崎幸病院は地域の医療ニーズに全体的に対応していく地域中核病院としての性格をまず持っているわけです。一方で、これからの日本の医療においては一病院で全ての領域をカバーするのは困難です。どの病院も特定の強い領域を持ちながら、それ以外の領域についてはある程度までは対応し、それ以上は他医療機関との連携によって地域の中で完結、というふうにならざるを得ません。新病院の計画にはこの二つの要素を折り合いをつけながら盛り

込んで行くことになります。

新病院事業に向けて検討すべきことは数多くあります。したがって、今から具体的な医療内容の検討と人員の準備をすすめる必要があります。どの診療科にどういう機械を入れるのか、開業医との関係は、研修の体制は、フル稼働した時に収まりきれないものにどのように対応して行くのか、などなど多くの課題があります。スタッフについて言えば、どこから引っ張ってくるのではなく、幸病院で育てて組織し、現時点から整備をすすめるのが原則です。急いで考えてゆかなければ、準備の時間はあっという間に過ぎてしまいます。

新病院では265床全体をフルに稼働させなければなりません。そのためには今現在の幸病院がフル稼働している必要があります。その点で危惧しているのは、幸病院の救急台数が、かつては月に450台くらいだったものが現在は明らかにこれより少ないという現状です。在院日数が短くなっている中で救急台数が減少している状況はとても病院がフル稼働しているとは言えません。今から様々な問題を克服して、フル稼働にもっていかねばなりません。

プロジェクト成功に向けて皆さんの協力をお願いします。

本紙タイトル『海燕』は、M・ゴーリキーの散文詩《海燕の歌》（1901）に由来しています。その大意は以下のとおりであり、石心会のイノベーションマインドの象徴として採用しました。

……暗鬱な雲がたれこめ、雷鳴が轟く空と海。戸惑い騒ぐばかりの鳴らの群を尻目に、  
海燕は激しく飛び交い、暗雲と雷鳴を切り裂いて一直線に飛翔する。

（編集部によるダイジェスト）



# 新・川崎幸病院の具体像

事務局長 辻田 征男

新川崎幸病院の場所、設計、スケジュールなどについて具体的に説明します。

## ■新病院のロケーション

新病院のロケーションはJR川崎駅西口から徒歩10分、幸区はもちろん、国道一号線や鶴見区、川崎区などいずれの方面からもアクセスしやすい位置です。救急車の受入れ、患者さんやご家族の来院などを考えると絶好のロケーションにあると言えます。

## ■新病院の位置付け

新病院は現在の中原分院の許可病床63床を吸収する形で265床に規模を拡大、これに救急用ホールディングベッド18床、外来透析ベッドを50床、入院患者用透析ベッド15床を設けます。新病院開院後の現在の幸病院は改装をして一部を幸クリニックに収まりきれない外来部門として使用し、その他では新病院では収容できない医療機能を持たせて運営する予定ですがこれらの事業年度は決まっておりません。

## ■事業推進の経過

2005年1月、石心会が川崎市住宅供給公社共同事業者募集要綱にもとづいて応募全

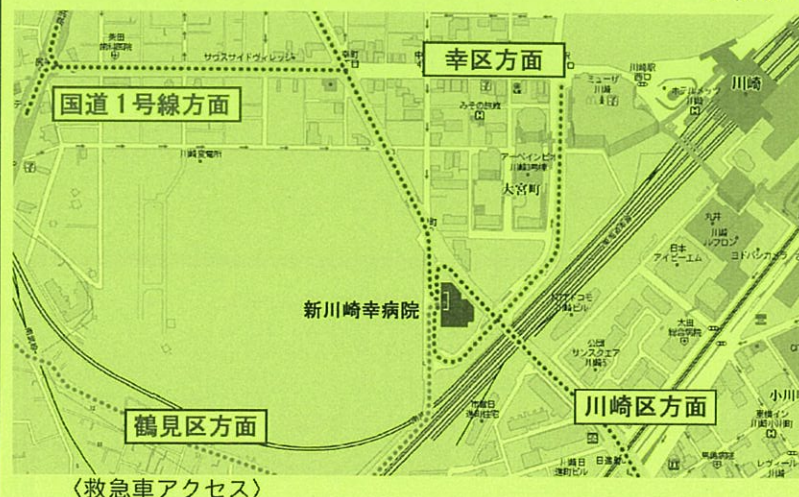
7者の中から第一候補者として選定されました。以降毎週、公社、石心会、関係機関による大宮町プロジェクト会議(通称PJ会議)が開催されました。以来、多くの課題について協議が重ねられ、途中、交渉が難航した経緯があったものの、2007年9月には、石心会が土地の70%を購入し、その上に石心会自らが病院を建設する2敷地2建物という事業スキームで公社と合意がなされました。

## ■設計案と現病院との比較

新病院の規模を現在の幸病院と比較してみましょう。1階部分については現幸病院の1.6倍の面積となります。1階は全てが救急部門であり、ホールディングベッド18床、救急診察室10ブース、CTなど画像診断装置を設置します。病棟フロアーは現在の1.23倍、(今後の設計次第でももう少し広がる可能性あり)病棟構成は1病棟37床(4床室と個室)で全7病棟、個室率は16%と考えています。新病院の全床面積は約5,500坪ですが、現在の幸病院本館(1,400坪)、南棟、これに分散している関連部署と中原分院を加えて約3,000坪ですから、新病院がいかに大規模かということをご想像していただけるものと思います。

## ■今後の日程

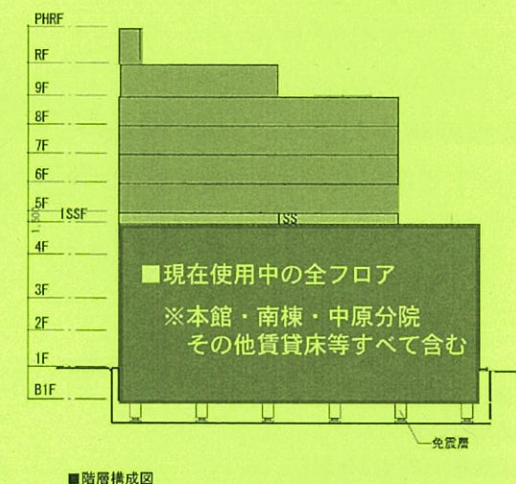
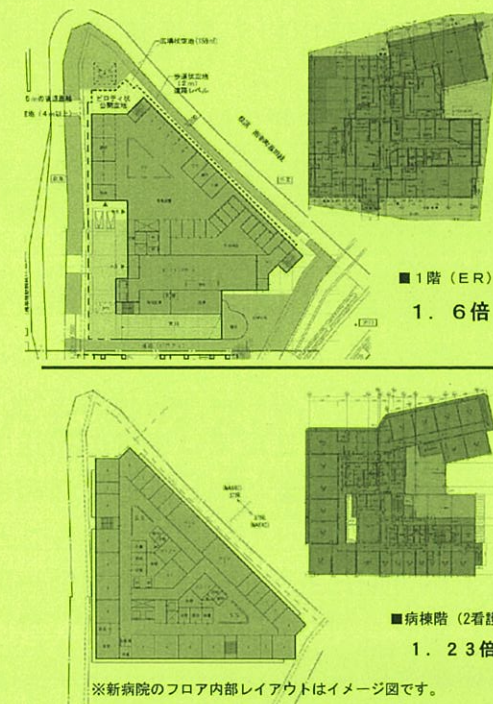
開院までの今後の工程です。基本計画の完了が2007年12月末、工事着工は2009年7月、工期は約22ヶ月を要し、竣工は2011年5月、開院は2011年9月を予定しています。



## ■元気な幸病院に

このプロジェクトがここまで漕ぎ付けることができたのは、従来からの川崎幸病院の実績と地域からの信頼があったからこそと言えます。しかしながら最近の川崎幸病院には救急医療を見ても今ひとつ往年の元気さがなく思えます。一方この新病院事業は投資規模から言っても石心会グループがこれまでに経験した事の無い大きなプロジェクトです。従っ

て一幸病院だけでなく石心会グループが総力を上げてサポートしていかなければなりません、なんといっても川崎幸病院の業績こそがプロジェクトを成功裏に進めるための鍵をにぎります。川崎幸病院がかつての元気を取り戻し、救急車受入れ数、入院患者数などについて十二分に稼働してもらうことが必要なのです。私たちは皆さんと共にこの事業の推進に向けてがんばって行きます。皆さんの奮闘を期待しています。



〈新旧病院面積比較〉

## ★トピックス①

### 中越沖地震被災地支援レポート

■7月16日に発生した新潟中越沖地震は現地に大きな被害をもたらしました。石心会グループでは被災地に医療支援チームを派遣、避難所をはじめとする各所で医療活動を展開しました。今回、チームのリーダーとして活動にあたった川崎幸病院の関川医師、狭山病院の小野田医師からのレポートをお届けします。(編集部)

## ■中越地震被災地医療協力雑感

川崎幸病院 副院長・外科部長 関川 浩司

7月16日の新潟県中越地方を襲った地震から2週間、街中にいまだ倒壊したままの家屋。避難所として提供された体育館では空間区分もさらにはクーラーもなく、ただ

じっとテレビを見続け、硬い床での睡眠にただひたすら耐えている人々。こんな環境の中で我々の医療協力は行われた。

避難所生活を余儀なくされている方々は担当地区だけでも200人を超し、その多くは高齢者であり、医療機関への移動手段がまだ



整っていないことも相まって、医療支援活動の必要性はなお大であると感じられた。我々が訪れた時期の診療の多くは不眠、不安感、ストレス、便秘症などが中心であったがこの医療協力を通して、特に

- 1) スムーズな医療活動の実践のためには地域ネットワークの構築が大事であり、病院内のみならず地域での組織作り、ネットワーク作りが急務である事を実感。
- 2) 災害医療は専門性を越えたまさに救急医療の原点である。この点は日頃の救急医療に対する医療者側のあるべき姿勢にも通じるものである事を再認識。

そのほか、他の医療チームがネーム入りのベスト、旗などを用意し活動を行っていたことが印象的であった。

ここ川崎は震災発生の確率が全国でも最も高い地区の一つであり、我々医療従事者は職種を越え、常日頃から災害発生時の対応について各自が心構えをしておくことが肝要である。

‘備えあれば憂い無し’

今回当院から医療協力に参加したスタッフ：

事務：佐々木（総務）

看護部：小原（救急）、梶山（3北）

医師：神林（脳外）、菊岡（内科）、関川（外科）

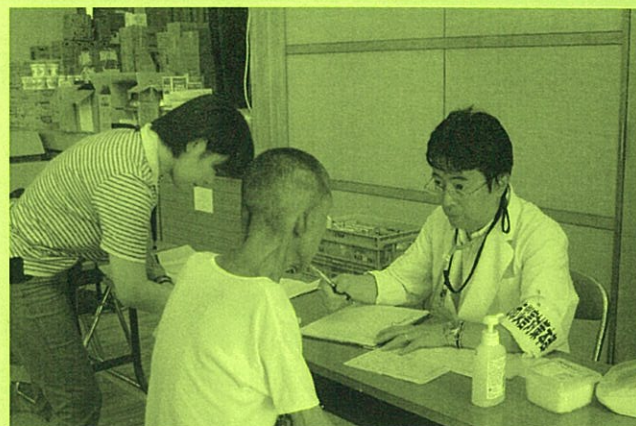


〈避難所で診療にあたる神林医師（右）〉

#### ■新潟県中越沖地震被災地を訪問して

狭山病院 診療副部長・内分泌代謝内科部長  
小野田教高

狭山病院からは、8月4～6日の3日間、新津義文医師（4～5日）と私（6日）が交代で、



〈問診中の小野田医師〉

看護部からは佐々木文子科長と小林比呂子主任が、また持田和夫事務長が終日張り付いて支援業務にあたった。

7月16日の地震発生直後は、県内外から多くのDMAT<sup>※</sup>が押し寄せ、支援活動と重症患者のトリアージを行ったはずである。しかしながら、彼らに対して具体的な指示を与える組織はなく、医師団を有効に指示できなかったという話も聞く。混乱の真っ只中、道路事情が悪い上に救急車自体も圧倒的に不足し、業務の律速段階は患者の搬送手段だったようだ。いずれにしても突然起きた災害の現場で、すべてに統制をとることは事実上不可能に近く、それでも初期の災害医療に献身されたスタッフの、熱い思いに畏敬の念を抱く。

我々が現地入りしたときは、地震発生から既に2週間以上経っていたため、状況はかなり違っていた。当初の混乱は影を潜め、柏崎市元気館に災害医療本部が設置され、すべての医療サポートチームは、決まった時間にこの場に集結し、避難所の情報収集を含め、スムーズな申し送りを行うことができた。実際の現場でも、われわれの判断でPTSDを疑う人は、「こころのケアチーム」にバトンタッチするシステムもできていた。

地震災害は突然やってくる。いつどこに起こるかわからない。脳裏に焼きついた強烈な情景を回顧しながら、決して他人事にできない神妙な思いを胸に現場を後にした。

※：DMAT＝災害医療支援チーム

## ★トピックス②

### 狭山病院開院20周年記念パーティー

－ 職員の力を結集して未来にチャレンジ！ －

9月14日、狭山病院の開院20周年記念パーティーが開催されました。1987年4月に288床で開設された狭山病院は現在349床、年間入院患者数は延べ10万人を超え、地域医療支援病院として狭山市、入間市を中心とする地域で中核的な役割を果たしており、今後はさらに医療の質の向上と機能の拡大が期待されています。

挨拶に立った青山院長からは「この20年の間に狭山病院は救急から急性期医療、病診連携、在宅医療まで、地域と社会のニーズに応える形で大きく発展、成長してきました。

医療の充実のためには、その中身を深く理解して積極的に行動してくれるスタッフが絶対に必要であり、だからこそ人材の育成には格別の力を注いできました。“もう少しの頑張りともう少しの優しさ、そしてもう少しの親切”、その積み重ねが限界を超えて新しいことを実現する力になるのです。我々は今後いっそう、地域から愛され、頼られる医療機関になっていかなければなりません。皆さんの力を結集して頑張っていきましょう」との力強いメッセージがありました。

## ★トピックス③

～川崎幸病院～

### 向原圭 医師 医学教育賞(懸田賞)受賞

■ この度、川崎幸病院の向原医師が、日本医学教育学会から医学教育賞「懸田賞」を授与されました。この賞は若手の研究者を対象として医学教育の奨励に貢献した者に毎年1名（または1組）に与えられる賞で、大変栄誉のあるものです。編集部では向原医師に受賞に関する寄稿を依頼しました。（編集部）

石心会グループの皆様、こんにちは。この度、日本医学教育学会より医学教育賞（懸田賞）という「若手の」医学教育研究者に対して贈られる賞を受賞してしまったのですが、編集部から寄稿依頼がありましたので、こうして書いています。私は川崎幸病院に就職する前は、名古屋大学の大学院生として医学教育関連のいろいろな研究をしたり、論文を書いたりしていました。その論文の一つが今回、医学教育学会の理事の方々の目に留まったようです。非常に光栄に思っております。受賞したのは、臨床実習直前の学生が大学病院を受診した外来患者に付き添うという実習の内容、

及びその効果について評価をしたという研究の結果をまとめた論文です。その詳細についてはスペースの都合上割愛させていただきますが、興味のある方はご連絡を頂ければ直接ご説明申し上げます。いずれにしても、今回の受賞は仕事を続けていく上での大きな励みとなりました。今後も、教育（又は学習）というキーワードを常に意識しながら、（誤解を恐れず書くならば、私自身が医者として成長する、学ぶ機会を与えてくれる、そのために存在している）一人一人の患者に対して一般内科医として恥ずかしくない仕事をしていければと思っています。

川崎幸病院 内科医師 向原 圭



## 《趣味探訪》

# 『サッカー一直線！』

川崎幸病院 内視鏡科 消化器内視鏡技師 井上 芽久実

9月10日から30日まで、中国で女子サッカーワールドカップが開催されました。「なでしこジャパン」(サッカー日本女子代表)という名前を耳にしたことがある方も少なくはないと思います。今でこそ周知されるようになった女子サッカーですが、私がボールを蹴り始めた小学2年生の頃は競技人口も少なくとてもマイナーなスポーツでした。

私がサッカーを始めたのは皆さんご存知の「キャプテン翼」がきっかけです。日向小次郎の大ファンで、サッカーというスポーツがとても面白そうに思えました。仲間と一体になって行うチームスポーツとしても魅力を感じました。



当時、私の通っていた小学校には少年サッカーチームがありました。もちろんメンバーは男子ばかりです。私は今では考えられない行動力で男子の中に女子一人という形で入部させてもらいました。そこに次第に他の女の子も入部してくるようになり、ついには女子チームが作れるまでになりました。もちろん出来たばかりの女子チームは弱小チームでしたが、毎日の練習で徐々に強くなっていくことを実感するのはとても楽しいことでした。私自身は小学校6年生の時にはDFとして神奈川県代表に選ばれ、オーストラリアへの遠征という貴重な体験もできました。

中学時代は学校の部活には入らずに、クラブチームに入っていました。女子サッカーは競技人口が少ないこともあり、中学生から社会人までが同じチームに所属します。小学生まではDFだった私ですが、足の速さを買われ、ある公式戦でいきなりFWとして起用されることになりました。いままで練習試合でもやったことのないポジションでしたが、懸命にボールに食らいついているうちになんと初得点！その時からゴールを決める醍醐味を覚え、ますますサッカーにはまっていきました。

中学2年生になると所属しているチームにスポンサーがつき、ベルマーレ平塚(現湘南ベルマーレ)の女子チームとして、日本女子サッカーリーグ(Lリーグ)に昇格しました(Lリーグとは女性版Jリーグのようなものです)。中学生でLリーガーになれたのはとても幸運だったと思います。その後、埼玉の大学に進学し、浦和レイナス(現浦和レッズレディース)というチームに入部。このチームは埼玉県リーグに所属し、

Lリーグ昇格を目指す新しいチームでしたが、2年連続でリーグ優勝を果たし、1999年には念願のLリーグへの昇格を果たしました。



Lリーグ最初の公式戦でチームの初得点を挙げたときの喜びと感動は今でもはっきりと覚えています。残念なのは、自分ではダイビングヘッドでかっこよく決めた、と思っていたのに、次の日の新聞に載った写真ではただその場に転んだようにしか写ってなかったこと。2001シーズン「キャプテン翼」より 日向小次郎)にはかつて浦和レッズのDFとして活躍した田口禎則氏が

監督に就任、元Jリーガー(日本代表になったこともあります)ただただあって、かなり熱い指導、厳しい練習でしたが、そのハードさもチームメイトがいたからこそ乗り越えられたのだと思います。その辛い練習の甲斐あって手にする勝利の味は格別でした。その後、大学4年間ともう一年、月曜日以外は練習や試合というサッカー中心の生活を送り、2002シーズンを最後に引退しました。

今あの頃を振り返って、満足のゆくまでサッカーができたことをとても幸せに思います。今の仕事を始めてからはフットサルをやっています。現在は浦和時代の仲間とチームを作り、東京都女子フットサルリーグに所属しています。公式戦が土曜日のためなかなか参加できないのが悩みですが。

フットサルはサッカーに比べるとコートも小さく、人数も5人なので初心者の方でも気軽に楽しめます。大会もスーパービギナーというものや、ミックスと言って男女混合チームで女性の得点が2倍になるというものもあり、女性にもお勧めです。

川崎幸病院ではサッカー好きが集まって第2、第4木曜日に羽田のフットサルコートで練習しています。興味のある方はぜひお声がけください。きっと楽しいはずです！



〈2002年：浦和レイナスFC 中段左から3人目が井上さん〉



## ミュージック・サロン



### ■さやま総合クリニック ヘルシーコンサート♪

恒例の狭山ヘルシーコンサート、今回は第7回「いろいろな楽器が勢揃い、名曲コンサート」のレポートをお届けします。今回はピアノにソプラノ、そしてハンドベルにお琴が加わるという珍しい編成です。コンサート全体を通して一曲一曲をいとおしむように歌うソプラノの響き、そしてこれを静かに支える楽器陣が見事なアンサンブルを奏でていました。今話題の「千の風になって」では聴衆の皆さんも一緒に声を出して歌い、会場は豊かな響きに包まれました。

■日 時：9月8日(土)

■曲 目：フォーレ：シチリアーノ、新井満：千の風になって、モーツァルト：トルコ行進曲 他

※演奏家プロフィール 冬美(ピアノ)：7歳の頃よりピアノをはじめる。現在、狭山市内を中心に地元でのピアノ演奏活動。妹尾福子(ソプラノ、ハンドベル)：医療法人社団新緑会、立川介護老人保健施設わかばに勤務。音楽療法士として活躍中。森角裕子(フルート)：国立音大フルート科卒業、フルートアンサンブル「ルベラージュ」のメンバーとして活動中。赤木舞(ピアノ)：米国イーストマン音楽院卒業、現在、東京芸術大学大学院応用音楽学専攻、博士課程に在学中。新原輝美(フルート)：武蔵野音楽大学卒業。北西ドイツ国立デトモルト音楽大学院を卒業。現在、後進の指導及びソロ、室内楽にて各地で活躍中。佐々木千香能(お琴)：東京芸術大学音楽学部卒業、NHK邦楽技能者育成会第40期修了。現在、亀山香能師に師事。古典現代の箏三絃で幅広く活動中。

#### ☆ヘルシーコンサートのいわれ☆

2003年3月、狭山総合クリニックの院長に就任した青山医師(現狭山病院長)が、クリニックを診療の場としてだけでなく、地域の人たちの文化的な交流の場にしたいと考え、私財でピアノを購入して提供するとともに、毎週土曜日の午後からピアノ演奏を主体にした「ヘルシーコンサート」を開催することを決めました。ホームページにも紹介していますが、このピアノは世界最高峰といわれる「スタインウェイ アンド サンズ」のコンサート用グランドピアノで、2000年のショパンコンクールで圧倒的な実力で一位優勝した中国のピアニストコンディ・リが練習用に愛用したものです。

#### 《読書のすすめ》

中尾 政之/著

光文社(2007-08-20出版)

光文社新書 税込：735円

### 「失敗は予測できる」

狭山病院 副院長 山根 正久

私たちの職場には絶えず事故や失敗の危険性が内在する。本書では、ある事象の失敗は別の場所で起きた以前の失敗と類似性があり、類似性に気づきさえすれば失敗は予測可能の範囲にあることを示している。著者は工学畑出身で、本書で取り上げているJR宝塚線事故に関する分析と解明はきわめて説得力があり、著者が説く、原因を根本から分析し、これをさらに個別化し、そのうえで、それぞれの個別的原因の帰結と対策を講じるという考えに私は賛成する。もちろん、この手法ではケースによっては

時間がかかりすぎ、必要な時点で結論を見出せない、あるいは周辺科学の発達に伴わなければその事象を解明出来ない、ということが起こり得る。医学発達の歴史を見ても、患者の死亡転帰なくパイオニアとなった臨床研究や研究機関、臨床医はありえなかったことが分かる。これらのことを考えると“好まれざる結果”すなわち即“医療事故”と決めてかかるように見える現在の風潮は、本来の意味での原因究明への姿勢を見失わせるとともに医療の本質をも損なう危険がありはしないだろうか。

## ★トピックス④

### 【川崎幸病院】

●7月14日 第18回うるおいコンサート(バイオリン・ピアノ・声楽)

●7月15日 臨床研修指定病院合同セミナーin東京ビッグサイト

(病院113施設/学生約1,360名参加)

●7月23日 救急隊意見交換会

●7月28日 納涼祭

●8月4～6日 新潟県中越沖地震医療チーム派遣

(医師：関川・神林・菊岡、看護師：梶山・小原、事務：佐々木)

●8月11日 第1回医療機器安全管理マニュアル説明会

●9月27日 理事長／事務局長による新病院移転に向けての院内講演

●定例救急隊勉強会(市内、鶴見の救急隊員が参加されました)

・7月18,25日 『外科的治療及び集中治療を必要とする上部消化管急性疾患』

(講師：外科副部長/後藤学) 参加者計14名

・9月26,27日 『くすりの副作用と中毒』(講師：薬剤科/根津良幸科長代理) 参加者計15名

●NST委員会主催勉強会

・7月25日 『NSTとは』～栄養と輸液の第一歩～基礎編～

・8月24日 『当院におけるNST活動について』

・9月26日 『NST活動と保険点数』『NSTと褥瘡予防・管理』

### 【狭山病院】

●7月28日 納涼祭

●8月4～6日 新潟県中越沖地震医療チーム派遣

(医師：新津・小野田、看護師：佐々木・小林、事務：持田)

●8月13日 本館特室5部屋リニューアル

●9月14日 狭山病院開院20周年記念パーティー

※元職員11名を含む270名の参加がありました。パーティーは青山院長と河村院長の挨拶で始まり、各部署からの出し物や勇壮に響く迫力満点の竜鳴太鼓の演技など、和気藹々と楽しい内容でした。後日職員には開院20周年の記念Quoカードが配布されました。毎日の業務は非常に忙しく大変ですが、そんな時に「もう少しの頑張りともう少しの優しさ、そしてもう少しの親切」を出して、これからは患者さんのために頑張っていきたいと思います。

●9月21日 霊安室リニューアル(天井・壁張替えと祭壇の入れ替え)

●9月30日 シネアンギオ室2改修工事及び装置入れ替え(10月1日より新装置にて検査)

●5月17日 嗜好調査実施(入院患者対象) 回収率79.7%

●院内勉強会

・7月5日 『医療安全の基礎』 参加者33名

・7月6日 『口腔ケアについて学ぼう』 参加者40名

・7月17日 『栄養プランの立て方』 参加者56名

・7月31日 『第1回保険診療講習会 DPCの現状』 参加者73名

・9月7日 『細菌検査データの見方・抗菌薬の選択・ICT活動について』 参加者101名

・9月11日 『簡易懸濁法とは』 参加者43名

・9月28日 『主な検体の採取方法・保存方法・注意点』 参加者66名



● 地域医療連携・公開カンファレンス

- ・ 7月20日 『市中肺炎の外来治療 ～JRS新ガイドラインに準拠して～』  
(講師:呼吸器内科部長/青島正大) 参加者70名
- ・ 7月26日 『フットケアの取り組みと外来導入パスについて』  
(講師:東京済生会中央病院看護師長/土方ふじこ) 参加者92名
- ・ 8月31日 『COPDの診断と治療 ～気管支喘息との鑑別を中心に～』  
(講師:呼吸器内科部長/青島正大) 参加者111名
- ・ 9月21日 『皮膚疾患の入院治療』『整容面を考慮した皮膚疾患の外科的治療』  
(講師:皮膚科医師/神戸有希望・形成外科副部長/工藤聡) 参加者78名
- ・ 9月27日 『第1回狭山・入間整形外科医会症例検討会』 参加者17名

【川崎幸クリニック】

- 7月14日 第18回うるおいコンサート(バイオリン・ピアノ・声楽)
- 9月13日 防災訓練 参加者50名
- 9月22日 院内研究発表会 ゴールデン杉山賞/放射線科、ベストスピーチ賞/栄養相談、  
クリニカルフューチャー賞/リハビリテーション室、ポイントオブビュー賞/検査室
- 気功教室 講師 臨床心理士 稲富正治  
・ 7/18,27 参加9名 ・ 8/22,24 参加計8名 ・ 9/25,27 参加計8名
- 食事の教室 管理栄養士  
・ 7/18 『肥満、脂肪肝の改善』～夏直前、減量にチャレンジ～ 参加者10名  
・ 8/8 『アルコール・おつまみ・水分のとり方』 参加者7名  
・ 9/19 『高血圧予防の食事』～塩分の適量を知る～ 参加者7名
- 心理相談室公開講座 臨床心理士  
・ 9/5 『リラックス健康法』 参加者12名

【さやま総合クリニック】

- 外来糖尿病教室  
・ 9月20日 『眼の合併症について』(指導:眼科医長/鈴木俊一・内科副部長/三好洋二)
- 健康教室 参加者10名  
・ 9月22日 『身近なアンチエイジング』(講師:ドック・検診科医長/大塚博紀) 参加者20名

【アルファメディック・クリニック】

- 7月28日 社団法人日本病院会 日本人間ドック学会 人間ドック健診施設機能評価認定
- 8月30～31日 第48回 日本人間ドック学会 学術大会参加(演題2題発表)

【川崎健診クリニック】

- 9月28日 日本人間ドック学会入会

【オリーブ】

- 7月7日 七夕祭り 壁画、七夕飾り製作
- 8月5日 納涼祭 出演:地元フラグループ「アロアロ」、沖縄エイサー踊り「かりゆし会」
- 9月19日 落語会

【新緑会脳神経外科】

- 9月18日 第3回 院内勉強会(講師:脳外科/帯刀光史、作業療法士/小泉雄一・柴崎千種)

【新緑会立川若葉町脳神経外科】

- 7月5日 東京社会保険事務局の立入検査
- 7月13日 立川市立看護学校就職説明会参加
- 8月18日 防災訓練実施(11名参加)
- 9月18日 電子カルテ(ワイズマン製)バージョンアップ

【立川介護老人保健施設わかば】

- 7月28日 納涼祭 参加者:入所者100名 他家族、ボランティア、職員
- 勉強会(於:わかば1階通所リハ)  
・ 7月18日 ①体位交換、②ベット上での移動動作 参加者30名  
・ 8月22日 第18回全国介護老人保健施設愛知大会の予演会  
『ザ・外食サービス大作戦』 参加者22名  
・ 9月19日 ①オムツの当て方、②腰痛体操(講師:白十字者) 参加者30名

【北部東わかば地域包括支援センター】

- 介護予防教室  
・ 7月4,11,18日 『あと10年は若くいられる! 知っておくと得をする体操指導者要請講座』  
(於:幸公民館) 参加者27名  
・ 8月20日 『認知症にならないために』(於:栄町東栄会公会堂) 参加者22名  
・ 9月18日 『認知症予防プログラム』(於:江ノ島公会堂) 参加者27名